

第三編 拓殖進展

明治十九年より四十五年に至る北海道庁前期

一 概 説

時勢の変化 本道の開拓は沿岸漁利のあるところから開始されて日高特にその俣端部は知られた漁場であり、初期の浦河支庁は十勝地方をも管掌していた。しかるに明治二十年以降内陸開拓に重点が移され、石狩空知上川より十勝北見の沃野に有力な農村が鉄道の開通と共に出現すると、日高は農村としての資源の弱少なためと主要交通路線から外れてしまったことによつて、昔日の面影を失つたかの感があつた。また漁業においても沿岸漁業から沖合漁業に進出するようになる、その基地となるべき漁港のないため本州より出漁して函館室蘭に根拠地をおく発動機船群の活躍に圧倒されてしまつた感がある。例えば三石の小林重吉のごとき有力な先覚者も函館に去り、地元漁業資本家の力も零細の範囲を出入するに過ぎなかつた。

行政官の交替頻繁 北海道庁がおかれてから明治三十四年西支庁長を迎えるまで、日高の開拓を担当推進すべき行政の首長は何れも任期が短かく、したがつて開拓の業績もすこぶる遅々たるもので振舞なかつた。管内住民の間にも沢茂吉、渡辺伊平、八田満次郎、本庄康平、大塚助吉、林重吉、守田安右衛門、田中仙次郎、飯田信三等の様に管々開拓に身心を打込んだものも出たが、日高の認識を深め力づよい政治力を開拓に導入し得るほどの大物は見当らないといつても過言ではなかつた。このため時勢の急速な変化に即応して郷土開拓の実をあげるべき明治二十年代において、日高は惜しくも地方開拓の好機を逃したわけである。

一 概 説

一〇一

第三編 拓殖進展

一〇二

着実な経営とその進展振り ところが明治三十四年になると、経歴においても手腕においても、申分のない支庁長西忠義をむかえる幸運が到来した。そしてこれは開院宮の御料牧場御成に備えるための上司の措置であつたと伝えられる。牧場は新冠と静内の山野に一一、五三二万坪の地を占めて、その良馬の血は日高の馬種の改良に益するところが多かつたが、一面良き農耕地を低位生産の儘にとどめて、日高の農地開発を阻んだとも言い得られる。そこでしばしばその解除の陳情が行われた。しかしこの御料牧場は高貴の方の相次ぐ御来場によつて広く世にその名を知られるに至つた。そしてこのことがやがて西支庁長の如き大物の赴任をみるに至つた因子ともみられよう。西は元来あまり頑健な質ではなかつたが至誠をモットウとして寧日なく職責の遂行に努めたので、開発は管内各方面にわたり着々進み、支庁長の性格上からして一大巨石の投ぜられたものはないとしても、すべてに向上と整頓を、住民、吏員ははじめて開発事業の要領と治政の方途を知り得て、自立し得るに至つたと言つてよい。一旦後進地となつた日高の頽勢は回復し得なかつたが、一応支庁管内として相應の態勢をつくり得たのである。

産馬による特色の發揮 日高が牧場として各種の好条件に恵まれていることは古くケブロンをおどろかしたごとく世人のすべて知るところであつた。二十一年本庄康平八田満次郎等は日高馬市会社をひらき御料牧場と連けいを密にし軍馬生産に力をそそぎ、以来来牧場を経営するもの多く産馬の点においては本道に日高ありの名を得た。さらに大塚助吉らは競走馬の生産に着目し、特に豊平号なる本邦馬産史上に記録される逸物を得て以来、競馬場裡に日高の名はとどろいた。しかしこれら馬産においても御料牧場、競走馬、軍馬生産等単なる花形的なものにすぎなく全住民を潤すところの大きな生産額に達したものでないことは、惜しいことであつた。

アイヌ問題 日高は本道アイヌの大半の居住地であつて、之が保護授産の仕事は夙に開始された。しかし之が成績は振わず。不逞な和人の介入するものがあつて紛乱をおこし又その徳性の低下も問題となつた。たまたま良教師が土人学校にあつて風教のために献身するものがあつたにしても、さらに大きな國家の援助を必要とするものであつた。

管内民に課された問題 交通難と漁港漁業の改善はすでにこのときからここにすむものの共同の課題となつた。その他土壤の保全、経営の多角化、副業の普及、土人生活の改善、自然の災害の対策等は一般的な本道の問題といつてよからう。日高の天然資源に

おいてもつとも重点を置かれる森林資源と鉱産資源は、まだ効果的に利用されるほどにいたらず、工業のごときもほとんど見通しがなかつた。

二 行政の展望

1 支庁及び各村の整備

明治十九年一月、札幌県を廃して北海道庁に統合し、初代長官岩村通俊は、かつて開拓使に在官した経験に基き多年の抱負を実現しようと思ひ込んでいた。明治十二年七月以降日高は函館分轄制をとつていたが、二十年六月この制をやめて浦河外六郡役所を浦河に設置し、辰野宗城を郡長に補した。これより郡長の交代が頻繁に行われ、何れも任期が短かく治績の見るべきものなく空しく十五年を経過した。これは日高開発の空白時代と称しても過言ではない。この間、本庁では北垣国道が長官となつて本道開拓の進展みるべきものがあるかに思われたが、中途にして中央の要職に転じてしまつた。そして三十二年園田長官が北海道十年計画をうち立てるに及んで、こゝにはじめて道開拓行政の希望の星を認めることになつたのである。だから前に述べた日高開発史の空白時代という表現は、日高のみに限つた言葉としては糧當でなく結局これは全道的な空白時代であり、沈滞期であつたわけである。これより先明治三十年に郡役所を改めて浦河支庁としたが、しばらくは実質的には依然旧態を脱し得なかつた。

然るに明治三十五年西忠義が檜山支庁長より浦河支庁長に転じ、練達な行政手腕と円満篤実な人柄を以て、ひたすら日高の開発にとめるに及んで、管内の産業民生は飛躍的な進歩をみるに至つた。在任中に九年、歴代理事者の中でその任期は最も長かつた。四十二年小樽支庁長に転任の報が伝わるや、管内の住民は慈父に訣れるがごとく悲しんだ。西自らもまたながく日高の将来を思うの一念に徹してその生涯を終えた。その人と為りを敬慕やまなかつた住民は彼の生前已に西神社を浦河に創建し、永く功德を頌えることとした。

町村行政については、さきに明治十三年二月、戸長役場制度がしかれて管内に九箇所の役場が設置され、その後多少の変遷があつたが、明治三十年になると北海道区制二級町村制の公布をみ、三十三年には亀田郡大野村外十ヶ町村に一級町村制が施行され、三